

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04141

研究課題名(和文)対人関係ゲームによる学級集団づくりが不登校の発生抑制に及ぼす影響

研究課題名(英文)Effects of the class system program using the social interaction games on the control of school refusal

研究代表者

田上 不二夫(Tagami, Fujio)

東京福祉大学・心理学部・教授

研究者番号：50015898

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、学級システムプログラムの不登校発生の抑制に及ぼす効果を検証することである。

研究協力学級は、小学校18学級、中学校10学級であった。5月初旬に学校生活充実感テストを実施し、その後、学級で対人関係ゲームを行った。7月中旬と12月中旬にふたたび学校生活充実感テストを実施し、学年の最後に不登校について調査した。

その結果、小学校の不登校の発生は18学級(778名)中1名であった。中学校では不登校は起こらなかった。学級システムプログラムは不登校の抑制に効果が認められたが、協力学級は無作為に選ばれたのではなく、対人関係の実施回数もいろいろであった。さらに検討が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで不登校に関する研究は学校に登校しなくなった児童生徒に焦点化して、事例研究を中心に行われてきた。本研究の学術的意義は、児童生徒個人ではなく学校環境に焦点を当てて、不登校の発生に及ぼす影響を究明したことである。

不登校は増えたまま減っていく心配がない。本研究の社会的意義は、不登校の発生を抑制する方法を開発したことである。また研究協力者の教師の実践を踏まえた意見を受け入れて、学校教育において使えるようにやりかたを具体化したことにある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to verify that practicing the class system program decreases the number of school refusing children. The class system program is a method of intervention in classroom community by using the social interaction games. The social interaction games is a counseling skill that connects a person with another using verbal or non-verbal communication and social interaction in games.

Eighteen classes of primary school and ten classes of junior high school were participated in this study. Teachers and schoolchildren practiced the social interaction games in their classrooms from April to the middle of July.

The result is that no child refused school except just one out of 778 children in primary school and none in junior high school. The class system program is effective on the control of school refusal but the classes were not chosen at random and not all of the classes practiced the social interaction games the same number of times.

研究分野：カウンセリング心理学

キーワード：学級システムプログラム 不登校 対人関係ゲーム 価値のトライアングル 学校生活充実感 登校支援 学級集団づくり

1. 研究開始当初の背景

「木を見て森を見ず」ということわざがある。いじめ、不登校、授業の成り立たない学級の問題など、学校は積極的に取り組んでおり成果をあげている。しかし問題は雨後のタケノコのように起こる。私たちは重要な点を見逃していないだろうか。学校で起こっている問題を解決しようと、児童生徒という木は見ているが、学校環境という森を見のがしているのかもしれない。

学校で問題が起こると児童生徒個人に焦点が当たりがちになる。このことを公害の問題で考えてみよう。ある地域に特徴的な病気が発生した場合、病気の原因を探っていくと、病気になった人の個人的な弱点が見つかることがある。さらに調査が進むと、環境に原因があることがわかってくる。個人に問題があったとしても、公害を起こす環境がなければ発病しなかったかもしれない。

学校においても、不適応を起こしている子どもを理解しようとする、子どもと家庭の問題が見えてくることがある。そこに注目しがちになるが、学校環境にも目を配る必要がある。2001年5月、世界保健機構の総会で、人間の生活機能と障害の分類法が採択された。その中で、障害者の社会生活の不自由さは、人と環境との相互関係によって起こると提言されている。身体障害の人は身体に障害があるから外出できないわけではない。車いすに乗れば外出できる。駅の改札口が広く、ホームにエレベーターがあれば電車に乗って出かけることができる。同じように学校で起こる問題についても、子どもを支えている学校環境を見なおす必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学級システムプログラムが不登校の発生を抑制する効果を検証することである。学級システムプログラムは、対人関係ゲームを使って学級集団に介入する方法であり(田上, 2017)、対人関係ゲームは、言語的・非言語的に人とかかわり合う遊び(活動)を使って、人とつながり、人と人を心理的につなぐカウンセリング技法である(田上, 2003, 2010)。

遊びによって人と人がつながるので、人の心に深く入り込む心的侵襲性が低く、人間関係を苦手に行っている児童生徒の心理的負担が比較的少ない。それでも段階的に人との交流を深めるなどのいねいな配慮が必要になる。

カウンセリングは個人の成長の支援を目標とすることが多い。それに対して、学級システムプログラムは学級環境に注目する点に独創性がある。

システムと聞くと家族療法を思いつく人がいるのかもしれない。しかし、システムは家族に限ったことではない。システム(system)とは、相互に影響を及ぼしあう要素から構成された、まとまりや仕組み全体をいう。それは学校・家族・企業から地域社会、国際社会、宇宙にまで広く存在している。また細胞や元素まで、きわめて小さいシステムもある。学級は、担任と学級の子どもたちが相互に影響しあっているシステムである。

教師と児童生徒、児童生徒間によい人間関係があれば、いじめは起こりにくいし不登校も起きにくい。また授業が成り立たない学級も、教師と児童生徒、児童生徒間の人間関係の問題が存在している。対人関係ゲームを用いた学級システムプログラムを使って互いに支え合う学級シ

システムづくりができれば、不登校をはじめとして、いじめ、授業の成り立たない学級の問題などを未然に防ぐことができるのではないだろうか。

3．研究の方法

研究協力学級は、小学校 18 学級、中学校 10 学級であった。

学級システムプログラムを実施する前年度の2月に、独自に開発した学級システムプログラムを使って、小中学校教員に学級システムプログラムの理論と対人関係ゲームの実施方法について5時間の研修を行った。研修終了後に研究協力者の募集を行った。

研究の許可を受けた学校において、研究協力者の学級担任が4月から7月中旬に学級で対人関係ゲームを実施した。学級の児童生徒の協力を得て、5月初旬、7月中旬、12月中旬に学校生活に関するアンケートを実施して、学級システムの年間の変化を測定した。年度末に不登校の発生について調査した。またプログラムの効果に対する教師の評価を3段階（1 効果がない、2 少し効果がある、3 かなり効果がある）で行った。

本研究は、東京福祉大学・大学院研究倫理審査委員会の承認をうけた。

4．研究成果

研究に協力した学級での不登校の発生は、小学校 778 名（18 学級）中 1 名であった。中学校では 370 名（10 学級）中 0 であった。

参加28学級で1年間の不登校の発生は1例であり、学級システムプログラムが不登校の発生を抑制する効果がみられたといえることができる。しかし研究参加学級は無作為に選ばれた学級ではなく、担任が学級経営に関心がある学級である可能性もある。研究を許可した学校は、学校環境づくりに関心がある学校という可能性がある。また対人関係ゲームの実施についても、数回しか実施していない学級から多数回実施している学級もあり、その違いについても検討したが、はっきりとした傾向が見られなかった。さらに詳細な分析が必要と思われる。

プログラムの効果についての教師の評価は表1に示されている。子ども相互に起こる変化は2.60でもっとも高く、担任に起こる変化、授業中の変化と続き、学校生活の変化も2.06で少し効果があると評価された。学級システムプログラムを実施することで、子ども相互の関係だけではなく、教師との関係や授業にも少しは変化があったと教師はみていた。

表1 プログラムの効果に対する教師の評価

| | 子ども相互に 起こる変化 | 担任に起こる 変化 | 授業中の 変化 | 学校生活の 変化 |
|------|-----------------|--------------|------------|-------------|
| 平均 | 2.60 | 2.33 | 2.25 | 2.06 |
| 標準偏差 | 0.60 | 0.71 | 0.71 | 0.40 |

1.効果がない、2.少し効果がある、3.かなり効果がある、
4非常に効果がある

<引用文献>

- 田上不二夫（編） 対人関係ゲームによる仲間づくり - 学級担任にできるカウンセリング - ,
金子書房, 2003, 181.
- 田上不二夫（編） 実践グループカウンセリング - 子どもが育ち合う学級集団づくり - , 金子
書房, 2010, 239.
- 田上不二夫 不登校の子どもへのつながりあう登校支援 - 対人関係ゲームを用いたシステム
ズ・アプローチ - , 金子書房, 2017, 136.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 中村恵子・田上不二夫 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 小学校生活充実感尺度の妥当性と信頼性の検討 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 感性福祉研究所年報 | 6. 最初と最後の頁 93-102 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中村恵子・田上不二夫 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 中学校生活充実感尺度の妥当性と信頼性の検討 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 感性福祉研究所年報 | 6. 最初と最後の頁 103-113 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 中村恵子・田上不二夫 |
| 2. 発表標題 社会的帰属集団の変容と中学生の適応行動との関係 |
| 3. 学会等名 一般社団法人日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 松澤裕子・田上不二夫 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームによる学級の人間関係づくり |
| 3. 学会等名 一般社団法人日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 田上不二夫 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームを用いた学級システムプログラム |
| 3. 学会等名 一般社団法人日本カウンセリング学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 田上不二夫・大澤靖彦・井ノ山正文・中村恵子・青戸泰子 |
| 2. 発表標題 学級システムプログラムは、どう教育に貢献できるか |
| 3. 学会等名 一般社団法人日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岸田幸弘・吉岡紀彦・伊澤孝・岸田優代・田上不二夫 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームのさらなる可能性を求めて 多様性のある学校・教員にコミットメントする対人関係ゲーム |
| 3. 学会等名 一般社団法人日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 田上不二夫・丹野宏昭・中村恵子・岸田幸弘・大澤靖彦 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームの実践を動機づける要因 - 対人関係ゲームを活用した学級システムプログラムの開発（その2） - |
| 3. 学会等名 （一社）日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 田上不二夫・岸田幸弘・大澤靖彦・丹野宏昭・中村恵子 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームを活用した学級システムプログラムの開発 -不登校の発生抑制に関する新しい視点- |
| 3. 学会等名 日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 西澤佳代・田上不二夫 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームによる学級の人間関係づくり 対人関係ゲームを日課に位置づけ学級システムの改善を目指した実践 |
| 3. 学会等名 日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 田上不二夫 大澤靖彦 丹野宏昭 岸田幸弘 |
| 2. 発表標題 対人関係ゲームによる学級の人間関係づくり(79) -実用化のための“学級集団プログラム”の事前研修会の持ち方- |
| 3. 学会等名 日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 田上不二夫 |
| 2. 発表標題 認知行動療法の学級システムとの出会い -学級集団プログラムの開発 |
| 3. 学会等名 日本カウンセリング学会(招待講演) |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 瀧澤洋司・田上不二夫・中村恵子・岸田幸広 |
| 2. 発表標題 「対人関係ゲーム」のさらなる可能性を求めて |
| 3. 学会等名 日本カウンセリング学会 |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 田上不二夫 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 金子書房 | 5. 総ページ数 152 |
| 3. 書名 不登校の子どもへのつながりあう登校支援 - 対人関係ゲームを用いたシステムズ・アプローチ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 岸田 幸弘 (Kishida Yukihiro) (70527580) | 松本大学・人間健康学部・教授 (33604) | |
| 研究分担者 | 丹野 宏昭 (Tanno Hiroaki) (70637149) | 東京福祉大学・心理学部・講師 (32304) | |
| 研究分担者 | 大澤 靖彦 (Osawa Yasuhiko) (80406298) | 東京福祉大学・心理学部・准教授 (32304) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|--|----|
| 研究 分担者 | 瀧澤 洋司 (Takizawa Youji) (60787498) | 昭和女子大学・人間社会学部・准教授 (32623) | |
| 研究 分担者 | 中村 恵子 (Nakamura Keiko) (80780717) | 東北福祉大学・総合福祉学部・准教授 (31304) | |